

2025 年9月7日 聖霊降臨節 第14主日礼拝

メッセージ「苦しみ呻く世界の中で」

牛田匡牧師

聖書 ローマの信徒への手紙 8章18-25 節

暑かった 8 月が過ぎ、9 月となりました。朝晩は若干涼しくなったとはいえ、日中はまだまだ厳しい暑さが続いています。先日は台風 15 号のために「線状降水帯」が発生した地域もあり、大雨や突風などの被害も出ています。「異常気象」という言葉が、すっかり定着してしまって、毎年毎年「今年は異常気象だ」と言っているような、それこそ「異常」が「通常」になってしまったようなおかしい感覚です。

それこそ、今では秋の虫の声も、聞かれる季節になったかと思いますが、今年の 7 月頃でしたか、「今年は暑すぎてセミの鳴き声が聞こえない」と言った声もありました。私の身の回りではずっとセミの声も聞かれていましたから、地域によってはそんなこともあるのだろうか、不思議に思っていました。今回の「招きの詞」には、いちじくもぶどうもオリーブの木も実をつけず、畑は実りをもたらさない。羊も牛も家畜らも皆いなくなってしまった（ハバクク 3:17-19）という、いわば絶望的な荒廃した情景が謳われています。春を告げる鳥たちも虫たちもいなくなり、「静寂な春、沈黙の春がやって来た」と言って、農薬として使っていた化学物質による自然破壊、環境汚染に警鐘を一早く鳴らした生物学者のレイチェル・カーソンの著作『沈黙の春』（1962 年）を連想させるかのようです。

地球環境は危機に瀕していると言われ続けて、早くも半世紀以上が経っていますが、今なおその危機的状況は続いているどころか、ますます地球の温暖化、気候変動は深刻化し、自然災害も激甚化しています。そのような世界、時代の中にあって、今、聖書の言葉は、私たちに何を伝えているのでしょうか。

今回の聖書の言葉は、パウロが書き送った「ローマの信徒への手紙」の中の一節でした。「被造物」、即ち神様によって造られた物、草も木も花も石も山も川も空も雲も海も魚も、全てが救われる、滅びから解放されるということが述べられている箇所です。水が豊富で、どこにでも緑が豊かに生い茂り、多様な虫の音を単

なる雑音、騒音として聞くのではなく、それこそ「虫の声」として聞き分けるような日本においては、^{さんせんそうもくしゅうぶっしょう}「山川草木悉有仏性」という言葉にも表されているような、全ての命や存在を尊ぶ世界観がありますが、世界全体でみるとむしろそのような考え方の方が当たり前ということではなさそうですし、キリスト教文化圏においてもパウロのこの言葉もそれほど注目されて来ていなかったようです。むしろ自然や世界というのは、人間が生きるために必要な道具であり、目的達成のための手段であり、人間によって支配され、管理され、使用される、そのようなモノとして理解されてきた歴史の方が長かったのではないだろうかと思います。

18 節以降は、「今この時の苦しみ」と、「将来私たちに現されるはずの栄光」という2つが対比される形で述べられています。今、私たち被造物は全ていずれ死んでいく存在、滅びを免れない存在であるけれども、将来的に皆、救われて、滅びから解放されていくのだと言われています。なぜでしょうか。それは 20 節ですが、そのように死ぬべき存在「虚無に服し」ているのは、「自分の意志」つまり誰かが何かをしたせい、何かしらの行動の結果ではなく、「服従させた方」つまり全てのものを造られた創造者である神が最初からそのようにデザインして造ったからだ、と説明されています。だからこそ、そのグランドデザイナーによって全てが新しく作り変えられる希望がある、希望がないはずがない。なぜなら全てを破壊し尽くして終わりというデザインはないから、というのです。

もう一つ、このパウロの手紙の中でカギとなっている言葉が「苦しみ」という言葉です。今の苦しみは、誰かが何かをしたせいによる、何かの罰ではない。むしろ今まで続いているこの呻きや苦しみはこれから来る栄光や救いに至るそのための「産みの苦しみ」なのだ(22-23)と……。たとえ今、確かに苦しい状況に置かれていたとしても、その行く先にあるのは絶望ではなくて希望である。だからこそ「忍耐して待ち望む」(25) ことができるのだと言われています。聖書には繰り返し、「全ては絶望で終わりではない」ということが述べられています(ローマ5:5)し、イエス様の十字架での死からの引き起こしも、そのことを表わしています。冒頭の「招きの詞」でも、収穫物もなく、家畜もいなくなってしまうけれども、それでも諦めない、絶望しない、神に望みを置くということが預言されていました。

思えば、大昔から人類が歩んできた道というのは、常に危険と隣り合わせで、怪我をすることも多く、場合によっては命を落とすことも、決して珍しくはなかったのだろうと思います。そのような苦しい状況の中で、それでも「今」を諦めないで希望を抱き続けるということを、聖書は昔から伝え続けて来ました。生きている限り、嬉しいことや楽しいことだけではなく、苦しいことも悲しいことも避けられないわけですが、それらに遭遇した時に、私たちはそれぞれにそれらの意味や理由を考えます。なぜなら人間というものも、それぞれの生涯を無意味に過ごすことには耐えられない存在だからです。当然、その意味付けや理由付けは人それぞれに異なるでしょうし、また同じ人であっても、時間の経過と共にその意味付けも、受け止め方も変わってくるかもしれません。それでも人任せにせず、それぞれの人が、自分で自分の人生を受け止め、意味付けしていくという所に、人権の源である各自唯一無二の「尊厳」というものがあるのだろうと思います。

なぜ今、世界にはこんなにも悲しいことや、辛いことが多いのか、戦争があり、自然災害があり、病気があるのか。その明確な答え、唯一無二の模範解答はありません。もしも、それが「ある」と断言するのはカルトあり、ファシズムです。それらの課題に対して諦めることなく、絶望することなく、問い続け、考え続け、取り組み続けることが、人間に与えられている自由であり、責任であり、使命なのではないかと思います。

形があり限りがあるこの世界の中で、形あるもの限りあるものをいくら手に入れたところで、それらはいずれ失われていくものです。仮に全ての富と全ての権力と、不老不死の体と命を手に入れた人がいたとしても、果たしてその人は本当に幸せになれるのでしょうか。「受けるよりは与えるほうが幸いである」「受けるよりも、持っている物を分かち合う方に神からの力が働く」(使徒言行録 20:35)という言葉もあるように、自分一人が受けること、手に入れることよりも、それらを隣の人たちと一緒に分かち合い、また次に伝えていくことにこそ、本当の価値がある。個人の物語の続きが紡がれていくことにつながるのではないかと思います。

気候変動や戦争、災害や病気など、今も世界は様々な苦難に呻いています。しかし、それでも私たちは生きることを投げ出さず、将来を諦めません。なぜなら全

てを造られた命の神が今もこれからも共におられ、滅びから解放されると約束されているからです。「すでに見ている希望は希望ではない」(24)。全てのグランドデザイナーである神様は、全ての命が贖われ、解放される天の国の実現に向けて、私たちを今日も招いてくださいます。